



応用生態工学会ニュースレター

No.79

Ecology and Civil Engineering Society (ECESJ)

2018 (平成 30 年) 年 2 月 14 日 (水) 発行

〔発行所〕 応用生態工学会事務局 〒102-0083 東京都千代田区麹町 4-7-5 麹町ロイヤルビル 405 号室
TEL : 03-5216-8401 FAX : 03-5216-8520 E-mail : eces-manager@ecesj.com HP : <https://www.ecesj.com/>
〔発行者〕 応用生態工学会 (編集責任者: 幹事長 北村 匡, 事務局長 青江 淳)

1	はじめに	1
2	応用生態工学会第 22 回大会 開催案内	2
3	2018 年度海外学会等への派遣者を募集します	3
4	2017 年度国際シンポジウム 開催報告	5
5	行事開催報告	
5.1	応用生態工学会広島 平成 29 年度行事 開催報告	9
5.2	応用生態工学会富山 平成 29 年度勉強会 開催報告	10
6	2017 年度行事経過と今後の予定	12
7	事務局より	15

1 はじめに

今年度最後のニュースレターとなります。学会第 22 回大会の開催案内、2018 年度海外学会等への派遣者の募集要領、各地の活動状況など、学会の動きをお伝えします。

学会第 22 回大会の開催案内を掲載しました

本年 9 月 21 日 (金) ~ 9 月 23 日 (日) の日程で第 22 回大会が東京工業大学大岡山キャンパスで開催されます。

この大会では、研究発表、自由集会、公開シンポジウム、エクスカージョン等を計画しています。

1 月 18 日 (木) には吉村千洋大会実行委員長出席のもと第 1 回実行委員会が開催されました。

2018 年度海外学会等への派遣者の募集要領を掲載しました

応募の締め切りは 3 月 31 日 (土) 事務局必着、4 月下旬までに決定される予定です。

本制度を活用した研究者や技術者から有意義な経験や体験が報告 (2017 年度の派遣者の報告はニュースレター No. 78 に掲載) されていますので、ぜひご応募を検討ください。

2017 年度国際シンポジウムの開催報告を掲載しました

「不確実性を増す気候および環境ストレス下での河川流域管理—アジアにおける洪水リスク対策と環境保全—」という切り口で、同様の課題に直面するアジア諸外国と合わせて事例・知見を共有し、今後の課題や展望が議論されました。

2 応用生態工学会 第 22 回東京大会 開催案内

応用生態工学会 2018 年度の第 22 回東京大会について、第 1 回実行委員会を 2018 年 1 月 18 日に開催し、開催準備がスタートしました。

■大会実行委員長：吉村千洋 東京工業大学准教授（学会第 10 期幹事）

■開催日と日程案

【開催日】2018 年 9 月 21 日(金)～2018 年 9 月 23 日(日) ※エキスカージョン含まず

【日程案】

1 日目：自由集会、ポスターコアタイム、役員会、各種委員会

2 日目：口頭発表、自由集会、懇親会

3 日目：総会、表彰、公開シンポジウム

※エキスカージョンは 9 月 20 日(木)の予定です。

スケジュールは、変更することがあります。詳細は、ニュースレター No. 80（5 月下旬発行予定）、ホームページにてご案内いたします。

■公開シンポジウムのテーマ（案）

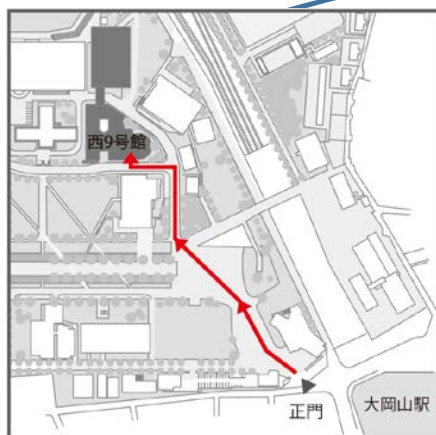
（仮）ダム湖や周辺環境の保全と再生に向けてーダム再生ビジョンと環境保全ー

■会場

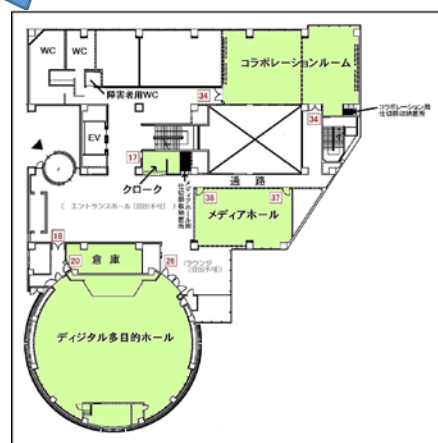
【開催場所】

東京工業大学 大岡山キャンパス（西 9 号館 2F、3F）

<https://www.titech.ac.jp/>



大岡山キャンパス 西 9 号館



大岡山キャンパス 西 9 号館 2F

【所在地】 東京都目黒区大岡山 2-12-1

【交通】右図のとおり

最寄り駅

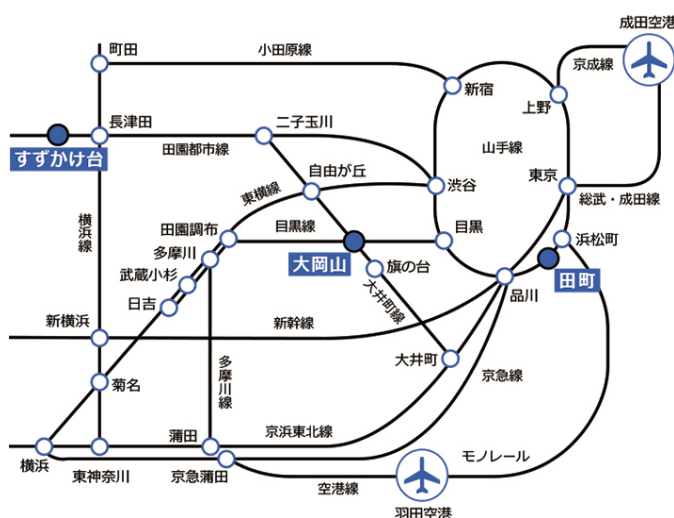
大岡山駅（東急大井町線・目黒線）

大岡山東地区 正門まで徒歩 1 分

緑が丘駅（東急大井町線）

大岡山北地区 緑が丘門まで徒歩 1 分

緑が丘地区 西門まで徒歩 3 分



3 2018 年度海外学会等への派遣者を募集します

国際交流委員長 根岸淳二郎

2018 年度の海外学会等への派遣者を募集します。以下の募集要領をご覧ください。本制度を活用した研究者や技術者から有意義な経験や体験が報告されていますので、ぜひご応募を検討ください。

2018 年度海外学会等への派遣者の募集

国際交流委員会

応用生態工学会国際交流委員会（委員長：根岸淳二郎）では、2018 年度の海外学会等への派遣者 1 名を募集します。募集要領の概略は以下のとおりです。詳細は、学会ホームページをご確認のうえ、事務局まで申し込みください。

海外学会等への派遣者募集要領

1. 目的

自然環境と開発の問題については、我が国だけに限らず多くの国々で関心が持たれ、様々な研究と実践的な試みが行われてきている。応用生態工学を発展させるためには、こうした海外での活動に積極的に係わり参加することによって、情報を得ながら、人的交流を図ることが求められている。

応用生態工学会では、ここに会員から希望者を募り、「派遣研究員」を審査選考して、当該年度に海外で開催される応用生態工学に関連する学会・シンポジウム・国際会議等に派遣し、その内容を応用生態工学会会員に報告するものである。

2. 選考

1) 資格

- ① 応用生態工学会の正・学生会員であること（募集開始時点で会員でなくても、会員となることを

条件として応募可能とする)

- ② 学生あるいは 35 歳未満の研究者・技術者

2) 派遣研究員の選考

- ① 学会としての総助成額を 20 万円とし、原則 1 名、場合によっては 2 名を選考する。
② 選考にあたっては国際交流委員会において書類審査を行い、候補者を選定した上で国際交流委員会にて決定し、幹事会および理事会に選考の経緯および結果を報告する。

3) 選考基準

- ① 派遣対象となる会議のテーマと本人のバックグラウンド(研究・調査経験)の整合性
② 派遣対象となる会議で何を学ぼうとしているのか、その焦点を明確に述べているか否か
③ 国際会議に出席して内容を把握できる能力
④ 応用生態工学への関心の度合い
⑤ 応用生態工学会での活動・参加状況・受賞歴
⑥ 派遣に関連する研究業績や業務実績

4) 派遣後の要件・手続き等

- ① 派遣研究員は、海外渡航の成果を指定の様式を用いて報告するものとする(報告内容は本学会のニュースレターおよび会誌“応用生態工学”に掲載します。なお、会誌“応用生態工学”では、「トピックス」に掲載します。)
② 派遣終了後は、助成額の使途(使用費目と金額)について、決算報告するものとする。渡航先によっては、助成額の総額を上回る金額を使用した場合も考えられるが、その場合は、それらも含めて決算報告を行う。使用金額が助成額の上限を超えなかった場合には、余剰金を応用生態工学会に返金するものとする。
③ 何らかの理由により海外渡航と学会参加を中止する事態が生じた場合には、すみやかに応用生態工学会事務局にその理由などを報告するものとする。
④ 派遣研究員は、関連した研究や技術開発について、会誌“応用生態工学”もしくは英文誌“Landscape and Ecological Engineering”に論文を投稿することが推奨される。

3. 申 請 書

派遣希望者は、会員番号、氏名、所属、連絡先(住所・TEL・FAX・E-mail)、年齢、性別、専門分野、希望派遣学会等(開催会議等の名称、主催者名、開催月日、開催国・地名、会議等の目的・内容、現地見学会の有無と内容、参加申し込み期限、参加費、研究発表を行うか否か(その形式)、案内パンフ等がありましたらそのコピーをお送りください)、および派遣希望理由(上記の「3)選考基準」の各項目)を、A4 計 3 枚以内(書式自由)にまとめ、郵送・FAX・E-mail 等にて学会事務局に申し込みください。
なお、4 月以降に所属が変わる場合は、4 月以降の連絡先も付記してください。

4. 申 込 期 間

2018 年 2 月 19 日(月)～3 月 31 日(土) 事務局必着

5. 派遣決定時期

2018 年 4 月下旬までに決定

6. 派遣を推奨する国際学会およびシンポジウム(以下の国際学会が主催する国際会議)

- Annual Meeting of Society for Freshwater Science (SFS)
<http://sfsannualmeeting.org/>
- American Geophysical Union (AGU) <http://sites.agu.org/>
- American Society of Limnology and Oceanography <http://aslo.org/index.php>

- European Geosciences Union (EGU) <http://www.egu.eu/>
- International Society for Ecological Modelling (ISEM)
<http://www.isemna.org/>
- International Society for River Science (ISRS) <http://www.riversociety.org/>
- International Water Association (IWA)
<http://www.iwa-network.org/>

なお、上記以外の国際学会やシンポジウムでも応募できます。

4 2017 年度国際シンポジウム開催報告

「不確実性を増す気候および環境ストレス下での河川流域管理

ーアジアにおける洪水リスク対策と環境保全ー」

国際交流委員長 根岸淳二郎

1. 日 時：2017 年 12 月 13 日（水）13：00～17：00
2. 会 場：東京工業大学 大岡山キャンパス レクチャーシアター
3. 参加者：70 名
4. プログラム

<基調講演>

「メコン生態系の危機：水管理インフラ開発、気候変動、および土地利用変化への適応」

Tom A. Cochrane (University of Canterbury, New Zealand, Associate professor)

<講演>

「全球から局所スケールでの気候変動による洪水および水資源への影響と近年の日本における災害からの示唆」

鼎 信次郎 (東京工業大学 教授)

「水災害分野における気候変動適応策について」

森本 輝 (国土交通省 水管理・国土保全局)

「香港における気候変動に係る都市排水インフラ計画・整備」

レイモンド・タイ氏 (Drainage Services Department (Hong Kong))

「グリーンインフラによる気候変動適応と生物多様性保全」

中村 太士 (北海道大学 教授)

<パネルディスカッション>

コーディネーター：渡辺 幸三 (愛媛大学 教授)

パネリスト：講演者

5. 開催の趣旨

気候変動に起因すると考えられる洪水や干ばつなどがこれまでにない規模・頻度あるいは期間で生じる事例が地球規模で報告されている。史上初めて 3 つの台風が北海道に上陸するなど、気候変動の兆候がアジア諸地域でも顕在化している。一方で、流域や河川における様々な生態系プロセスに支配的な環境ストレスを与えるとされてきた土地利用の変化、汚濁物質の水域への流入や蓄積、さらに物理的構造

改変などの負の影響は継続して存在している。将来気候の予測は不確実性を内包するため、予測困難な降雨による洪水・渇水リスクとともに、その他環境ストレスへの対策と自然生態系の保全を両立させる順応的な河川・流域管理が求められている。このニーズに応じ、本国際シンポジウムでは、「不確実性を増す気候および環境ストレス下での河川流域管理ーアジアにおける洪水リスク対策と環境保全ー」という切り口で、同様の課題に直面するアジア諸外国と合わせて事例・知見を共有し、今後の課題や展望を議論した。本国際シンポジウムは応用生態工学会国際交流委員会により企画され、2017 年 12 月 13 日（水曜日）の午後に東京工業大学大岡山キャンパスレクチャーシアターに於いて約 70 名の参加者が集い、開催された。

6. 基調講演

ニュージーランド・カンタベリー大のトーマス・コ克蘭准教授による「メコン生態系の危機：水管理インフラ開発、気候変動、および土地利用変化への適応」の話題提供があった。コ克蘭氏は、気候変動とその他人間活動によるメコン流域および河川システムの環境変化について土砂水理学の観点から現状を説明した。メコン川は、生物多様性および供給される生態系サービスにおいて地域社会に極めて重要であるが、水資源開発のための流域内のダムなどのインフラ整備、気候変動と海面上昇、そして人口増加にともなう水需要の増大がその持続性に対しての大きな危機となっていることを示した。1990 年代前後でのダムなどによる流量制御により特に上流域での水位変動が著しく変化しており、一方で、下流のデルタ地帯は、土砂供給量の低下と海面上昇により人間生活が大きな負の影響を受けるとのシナリオを示した。今後、流域内関係地域・諸国が下流への影響を多角的に理解しながら、相互理解協力のもとダム等の運用を検討あるいは土地利用の調整していくことが有効な適応策の策定および実施につながるとした。

7. 講演

鼎信次郎教授（東京工業大学「全球から局所スケールでの気候変動による洪水および水資源への影響と近年の日本における災害からの示唆」）、森本輝氏（国土交通省「水災害分野における気候変動適応策について」）、レイモンド・タイ氏（香港特別共生区政府「香港における気候変動に係る都市排水インフラ計画・整備」）、中村太士教授（北海道大学「グリーンインフラによる気候変動適応と生物多様性保全」）の 4 名から様々な時空間スケールおよび観点からの関連事象についての講演が行われた。

8. パネルディスカッション

渡辺幸三教授（愛媛大学）のコーディネートで 5 名の演者によるパネルディスカッションを行い、①気候/水文モデル研究の今後の方向性、②治水・利水中心の気候変動適応策と生態系保全のバランスのとり方、③自然の営力に一部依存したハイブリッドインフラの可能性、④適応策の政策決定や実行のプロセス、の主に 4 つの観点から議論が行われた。会場参加者である行政関係者、技術者、研究者、学生からの質問も交えて活発な意見交換が行われた。

8. エクスカーション

翌 14 日には奥田晃久氏（国土交通省）が関東地方整備局河川事務所との連携を通じてコ克蘭氏とタイ氏を多摩川および鶴見川の管理・防災・治水・教育に係る施設（大師河原河川防災ステーションや鶴見川流域センター）へのエクスカーションを提供され、現地においても有意義に河川・流域管理に係る各種事業現場視察と管理者との意見交換などを行った。

9. おわりに

本シンポジウムの講演内容やパネルディスカッションの詳細については、応用生態工学会誌に報告として、掲載予定である。



Speakers

Assoc. Prof. Thomas Cochrane
(Univ. of Canterbury, NZ)

"Mekong Ecosystems at Risk:
Adapting to impacts of water infrastructure
development, climate change and land use change"

Prof. Sinjiro Kanae (Tokyo Tech, Japan)

"Impact of climate change on floods and water
resources on global to local scales and implication
from recent disasters in Japan"

Ministry of Land Infrastructure,
Transport and Tourism (Japan)

"Water-related disaster management for
adaptation to climate change"

Drainage Services Department
(Hong Kong)

"Climate change and its implication on planning
and construction of drainage infrastructure
in Hong Kong"

Prof. Futoshi Nakamura
(Hokkaido Univ., Japan)

"Adaptation to climate change and biodiversity
conservation using green-infrastructure"

Organized by



DATE: 13 Dec. 2017

TIME: 1:00pm-5:00pm

Tokyo Tech, Lecture Theatre

Managing rivers & watersheds in the Asian region under climate uncertainty & anthropogenic stressors

Climate change-related weather anomalies have increasingly become apparent in the Asian region. Demands for knowledge to better management of rivers and watersheds by taking a good balance of engineering flow control and conservation of biodiversity have never been higher. This symposium aims to bring knowledge and experiences in different countries together and discuss prospective countermeasures.

To register/for inquiries, contact with "name" &
"affiliation" to eces2017symposium@gmail.com

Funded by

The River Foundation



河川 公益財団法人河川財団による
基金 河川基金の助成を受けています。



写真1 基調講演を行うコ克蘭氏



写真2 パネルディスカッションの様子



写真3 エクスカーションで訪問した鶴見川流域センターの様子

5 行事開催報告

5.1 応用生態工学会広島・土木学会水工学委員会環境水理部会ジョイントシンポジウム [第2回] ～ダム貯水池の水環境に関する現状と将来(第2回) in 松江～開催報告

応用生態工学会広島 山原康嗣(中電技術コンサルタント株式会社)

1. 開催趣旨

中国地方をはじめとして、多くのダム貯水池では、アオコをはじめとした富栄養化現象や底層部の貧酸素化現象、それらに伴う異臭や着色の発生等、水環境に関する様々な課題を抱えており、今後、官・学・民それぞれの立場や一体となった水環境改善に向けた取り組みが不可欠となっています。

昨年度、応用生態工学および環境水理学の観点から、「ダム貯水池の水環境」に関するシンポジウムを広島において開催し、講演者と中心として、現象や解析技術、対策手法等の現状と今後の展開の方向性について討議を行いました。今年度は、開催場所を島根県(松江市)として、行政、研究者、実務者のそれぞれの立場でのダム貯水池の水環境に関する現状や課題について、講演をいただきました。

また、5人の講師の方の講演内容を踏まえ、ダム湖におけるアオコやカビ臭問題を焦点として、今後の展開、展望について、島根大学エスチュアリー研究センター 矢島啓先生のコーディネートのもと、講演者とシンポジウム参加者を含めた総合討議を行いました。



2. シンポジウム概要

- (1) 開催日時：平成 29 年 11 月 7 日(火) 13:30～17:30
- (2) 開催場所：松江テルサ大会議室(島根県松江市朝日町)
- (3) 参加者：120 名(学 9, 官 35, 財団 19, 産 57)
- (4) プログラム

趣旨説明 赤松 良久(山口大学大学院 創成科学研究科 准教授)

講演①「島根県三瓶ダムの水質改善の取り組み」

福田 慎(島根県 土木部 河川課 河川開発室 企画幹)

講演②「ダム貯水池のカビ臭の発生状況とその発生メカニズムについて」

黒川 岳司(呉工業高等専門学校 環境都市工学分野 准教授)

講演③「島根県管理ダムにおける水質対策の効果と課題」

増木 新吾(島根大学 エスチュアリー研究センター 特任助教)

講演④「ダム貯水池における生物現象と現象発生に伴う課題」

大谷 修司(島根大学 教育学部 自然環境教育専攻 教授)

講演⑤「ダム貯水池におけるカビ臭対策事例」

木村 文宣(一般財団法人 水源地環境センター 研究第二部 主任研究員)

総合討論会 コーディネーター 矢島 啓(島根大学 エスチュアリー研究センター 教授)

3. おわりに

当日は会場が満席となるほどの参加者があり、講演会後の意見交換会も含めて活発な議論が行われました。共催の島根大学エスチュアリー研究センター、また、後援の国土交通省中国地方整備局、島根県、一般社団法人建設コンサルタンツ協会中国支部には多大な協力をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

5.2 応用生態工学富山 平成29年度勉強会 開催報告

応用生態工学会富山 富山大学大学院理工学研究部 竜田 尚希

1. 概要

応用生態工学 富山地域研究会では、一般の方の環境学習や会員相互の情報交換を目的に、北信越でのワークショップや事例発表会、技術研究会等を開催しています。

今回、「天然記念物イタセンパラの再生の軌跡」と題して、平成 29 年 12 月 2 日（土）に富山地域勉強会を実施しました。平成 18 年に氷見市イタセンパラ保護池にて現地見学会が行われた第 5 回北信越ワークショップから既に 10 年以上が経過しており、その後の変化や現状を確認することを目的としました。

また、射水市及びその周辺の里山地域において、生物多様性保存型里山ビオトープの形成及び維持管理や自然観察・水生昆虫の調査・研究を行っている「NPO 法人 自然環境ネットワーク・射水市ビオトープ協会」を招き、その実績や状況についてご講演を頂きました。

今回の参加者は、見学会 33 名、勉強会 35 名でした。

2. 現地見学会

当日は、13時にひみラボ水族館に集合後、氷見市教育委員会 教育総務課 主任学芸員の西尾様よりイタセンパラ保護池の概要の説明を受け、現地へ移動しました。

イタセンパラ保護池では、イタセンパラの繁殖数や生存率の調査、繁殖には欠かせない二枚貝の成長度や肥満度の調査を行いながら、本来の生息域である万尾川や仏生寺川との生息環境の比較を行うなど、イタセンパラが野生復帰できる環境の調査や研究が行われています。平成15年度から「イタセンパラ再生事業」を行っており、現在では毎年2000個体の稚魚が保護池で確認できる生息状況になっています。

イタセンパラは、コイ科タナゴ亜科に属する日本固有の純淡水魚であり、生きた淡水性二枚貝の鰓の中に卵を産むという特徴的な繁殖生態をもっているため、淡水性二枚貝の保全対策が必要不可欠となります。保護池は、この両種の生息域である低平地の氾濫原環境を人工的に作り出しています。さらに、これまでの研究成果から、水田とそこで行われる米作りがイタセンパラの繁殖に重要な役割を持っていることがわかり、保護池の上流に水田を作り、実際に米作りを行っているとの説明を受けました。また、外来生物が入り込み、その除去に苦労していることや、イノシシの侵入により土手を壊される等の被害を受けており、来年度は金網のフェンスを設置する計画であるとの説明を受けました。



高橋剛一郎会長による開会の挨拶



イタセンパラ保護池の様子

3. 室内勉強会

現地見学会の後、ひみラボ水族館へ移動し、室内勉強会を行いました。2名の方から話題提供をいただき、現地見学会を踏まえた活発な勉強会が実施されました。

3.1 講演「イタセンパラの現状と地域と協働した保全活動」

(氷見市教育委員会 教育総務課 主任学芸員 西尾正輝)

イタセンパラは、淀川水系、木曽川水系および富山県氷見市の万尾川水系の3箇所のみ生息する国指定の天然記念物であり、環境省レッドリスト「絶滅危惧IA類」に指定される極めて絶滅に近い状態であることの説明を受けました。さらに淀川水系、木曽川水系のイタセンパラの個体数が減少している中で、氷見市では増殖に成功しており、様々な研究成果を残していることが分かりました。

研究成果の中で、水田のイタセンパラと二枚貝への影響を調査した結果から、水田が動物プランクトンを生産し、イタセンパラの餌として万尾川に供給されることや、住民による河岸の草刈りがイタセンパラの生育に必要な「日当たり」を生み出していること、さらに秋の稲刈りに伴う河川水位の低下や、豪雨や台風による河床のヘドロの除去など、イタセンパラと二枚貝のライフサイクルに、米作りという人の活動が大変密接に関わっていることが理解できました。

この米作りとイタセンパラを結びつけた「イタセンパラ米」の商標登録など、研究成果から地域活性の経済活動に結びつける取り組みも大変興味深いものでした。

また、地域でイタセンパラを保護するという教育、啓蒙活動として、今後の環境保護の担い手である子どもたちやその親を対象とした「イタセンパラ守り人」制度を設けて保護活動を行っており、次世代へ永続して活動を引き継いでいく仕組みを作ることの大切さが理解できました。

3.2 講演「生物多様性保存型里山ビオトープの形成とその活用に関する事業」

(NPO法人自然環境ネットワーク・射水市ビオトープ協会 会長 岡田一雄)

射水市を活動の拠点に置くNPO法人自然環境ネットワーク・射水市ビオトープ協会は、里山自然の多い射水市の丘陵地帯において、生物多様性の保存を目指したビオトープの形成を行うことで、地域在来生物の保全活動を行っている団体です。

主に次の3つの活動を行っており、これまでに約1.5haにわたる里山ビオトープを造成してきました。

- ① 外来植物や侵入竹の伐採を行い、地域在来種の広葉樹を植林することで、植物相豊かな森林を造成する。
- ② ホタルやトンボ、カエルやサンショウウオ等の産卵地を確保するための池や水路を山林の中に造成し、地域在来生物の保全を図る。
- ③ 里山の魅力・生物多様性の理念を発信するために自然観察会や自然環境セミナーなどを行い、子供からシニアまでの幅広い環境教育を行う。

このような活動とその実績が評価され、全国のビオトープ関係者が見学に訪れるようなビオトープが生み出されています。

シニア世代を中心にした市民協働の楽しい活動を通して、ビオトープの造成のみにとどまらない活動の広がりには感銘を受けました。



西尾正輝氏による講演



イタセンパラ



岡田一雄氏による講演

4. おわりに

国の天然記念物「イタセンパラ」が、自然に近い状況で生息している環境は氷見市にしかなく、その保護活動が10年間あまりの活動で目覚ましい成果をあげていました。特に研究成果が、地域の活性化や教育にも生かされている状況には、スタッフの信念と絶え間ない努力の賜であろうと考えます。

また、射水市における里山ビオトープの造成による生物保護活動においても、社会教育や生涯学習の場を地域に提供することを行っており、それらが人の集まる魅力的な場となっていることに感銘を受けました。

どちらの活動も自然と人との繋がりが大切であること、その繋がりが生物の多様性を生み出していることを改めて認識することが出来ました。

今回の勉強会にご参加いただいた皆様、及びスタッフの皆様、どうもありがとうございました。次回も宜しくお願い致します。



富山河川国道事務所 副所長
渡邊一成氏による閉会挨拶



イタセンパラ保護池にて

6 2017 年度行事経過と今後の予定

2017 年度（平成 29 年度）行事経過と今後の予定

4. 1	2017 年度（平成 29 年度）開始
4. 1～30	2017 年度海外学会等への派遣者の募集（募集期間延長）
4. 9	第 3 回北信越技術研究会（神通川、富山県民会館）
4. 12	ELR2017 名古屋 第 2 回実行委員会（名古屋大学大学院環境学研究科）
4. 13	第 1 回次期役員募集・推薦委員会（麴町：応用生態工学会事務所）
5. 1～12	国際交流委員会（メール会議）
5. 25	第 72 回幹事会（麴町：応用生態工学会事務所）
5. 27～31	国際交流委員会（メール会議）、2017 年度海外学会等への派遣者決定
5. 30	ニュースレター76号発行
6. 1～30	次期（第 11 期）役員候補募集
6. 10	応用生態工学会長野・河川生態学術研究会共同シンポジウム（信州大学繊維学部） 上下流の連続性を考える一千曲川をフィールドとした生物生産研究の紹介
6. 14～23	国際交流委員会（メール会議）
6. 23	会誌編集委員会編集幹事会（麴町：応用生態工学会事務所）
6. 29	第 87 回理事会（TKP 四ツ谷第一）
6. 29	地域研究会「応用生態工学会岡山」設立
7. 6	第 2 回次期役員募集・推薦委員会（麴町：応用生態工学会事務所）
7. 8	ELR2017 名古屋 第 3 回実行委員会（名古屋大学大学院環境学研究科）
7. 25～27	第 3 回次期役員募集・推薦委員会（メール会議）
7. 29	応用生態工学会 平成 29 年 7 月九州北部豪雨災害調査団の結成

8. 1	第 73 回幹事会 (麴町：応用生態工学会事務所)
8. 16	ニュースレター77号発行
8. 30	第 88 回理事会 (麴町：弘済会館)
9. 2	第 3 回ミュージアム連携ワークショップ in 岸和田 (岸和田阪南 2 区人工干潟、きしわだ自然資料館)
9. 13	平成 29 年 7 月九州北部豪雨災害報告会 (主催：九州大学平成 29 年 7 月九州北部豪雨災害調査・復旧・復興支援団) において、応用生態工学会 平成 29 年 7 月九州北部豪雨災害調査団が「持続的で豊かな暮らしと環境を再生するための緊急提言」を発表 (九州大学伊都キャンパス)
9. 22～25	第 21 回大会／ELR2017 名古屋 (名古屋大学東山キャンパス) 9 月 22 日 (金)：研究集会 9 月 23 日 (土)：研究発表 (口頭発表、ポスター発表)、研究集会、技術・製品紹介、ICLEE 8th Conference 口頭発表、国際シンポジウム、懇親会 9 月 24 日 (日)：研究発表 (口頭発表、ポスター発表)、技術・製品紹介、第 21 回総会、公開シンポジウム 9 月 25 日 (月)：エクスカージョン
9. 22	会誌編集委員会 (名古屋大学環境総合館)
9. 22	国際交流委員会 (名古屋大学環境総合館)
9. 22	普及・連携委員会 (名古屋大学環境総合館)
9. 22	第 74 回幹事会 (名古屋大学環境総合館)
9. 22	第 89 回理事会 (名古屋大学環境総合館)
9. 22	第 6 回河川砂防技術基準 (調査編) をもとにした意見交換会 (名古屋大学環境総合館)
9. 24	第 21 回総会 (名古屋大学環境総合館)
9. 24	第 90 回理事会・第 75 回幹事会合同役員会 (名古屋大学環境総合館)
9. 28	会誌「応用生態工学」Vol. 20-1 (20 周年記念特集号) 発行
10. 16	応用生態工学会名古屋 フィールドシンポジウム in 木曽川 ～河川環境の保全・再生を目指して～ (一宮市商工会議所)
10. 20～21	第 16 回北信越現地ワークショップ in 石川「流域の連続性の回復～小さな自然再生から流域の地域再生を目指して～」 (金沢市 IT ビジネスプラザ武蔵)
11. 6	応用生態工学会 第 22 回大会準備会 (東京工業大学大岡山キャンパス)
11. 7	＜共催＞応用生態工学会広島・土木学会水工学委員会環境水理部会ジョイントシンポジウム～ダム貯水池の水環境に関する現状と将来 (第 2 回) in 松江～ (松江市 松江テルサ)
11. 12～16	第 91 回理事会 (メール会議)
11. 20	＜共催・河川生態学術研究会＞第 20 回河川生態学術研究発表会 (東京都中央区 浜離宮朝日ホール)
12. 2	応用生態工学会富山 平成 29 年度勉強会 (氷見市 ひみラボ水族館)
12. 6～7	＜共催・「小さな自然再生」研究会＞応用生態工学会大阪、岡山 第 7 回「小さな自然再生」現地研修会 (岡山県西栗倉村)
12. 13	＜共催・日本河川・流域再生ネットワーク (JRRN) ＞2017 年度国際シンポジウム「不確実性を増す気候および環境ストレス下での河川流域管理ーアジアにおける洪水リスク対策と環境保全ー」 (東京工業大学大岡山キャンパスレクチャーシアター)
12. 14	第 76 回幹事会 (麴町：応用生態工学会事務所)

12. 28	ニュースレター78号発行
1. 18	応用生態工学会 第22回大会第1回実行委員会 (東京工業大学 大岡山キャンパス)
1. 25	＜共催・北海道大学農学院農学研究院＞応用生態工学会札幌 シンポジウム「川と魚、人間社会のつながり」 (北海道大学農学研究院動物生態学研究室)
1. 27	＜後援・札幌ワイルドサーモンプロジェクト＞応用生態工学会札幌 札幌ワイルドサーモンプロジェクト 市民フォーラム2018「サケは、めぐる ～Salmon Go Around～」 (札幌エルプラザ 4F ホール)
1. 27	普及・連携委員会 (阿南市 ひまわり会館)
1. 27～28	＜共催・国土交通省 那賀川河川事務所＞第9回全国フィールドシンポジウム in 阿南～砂レキが復活し、清流にアユが躍る那賀川づくり～ (阿南市 ひまわり会館)
1. 31	＜共催・(公財) 福井県建設技術公社＞応用生態工学会福井 平成29年度地域勉強会 (国土交通省 福井河川国道事務所)
1. 31	応用生態工学会福岡 第7回遠賀川中島自然再生研究会 (遠賀川水辺館めだかホール)
2. 14	ニュースレター79号発行
2 月	会誌「応用生態工学」Vol.20-2 発行
2.19～3.31	2018年度海外学会等への派遣員の募集
3. 2	第92回理事会 (麴町：弘済会館)
3.31	2017年度(平成29年度)終了

2018年度(H30年度)行事の予定

4. 1	2018年度(平成30年度)開始
4 月	国際交流委員会(メール会議), 2018年度海外学会等への派遣者決定
5 月	ニュースレター80号発行
5 月	幹事会 (麴町：応用生態工学会事務所)
6 月	理事会
7 月	会誌「応用生態工学」Vol.21-1 発行
7 月	ニュースレター81号発行
7 月	幹事会 (麴町：応用生態工学会事務所)
8 月	理事会
9.21～23	応用生態工学会 第22回大会 (東京工業大学大岡山キャンパス)
9.21～23	大会期間中に幹事会、理事会、各委員会を開催 (東京工業大学大岡山キャンパス)
12 月	ニュースレター82号発行
12 月	幹事会 (麴町：応用生態工学会事務所)
12 月	会誌「応用生態工学」Vol.21-2 発行
2 月	ニュースレター83号発行
2 月	理事会

7 事務局より

7.1 いつもながらの勤務先等の会員情報変更登録のお願い

会員情報の変更登録は、ホームページのトップ画面右上の「入退会・登録変更・購読」バナーから入り、「会員登録情報変更フォーム」から入力して送信してください。

また、下記 URL で「会員登録情報変更フォーム」へ直接接続することもできます。

<https://www.ecesj.com/FS-APL/FS-Form/form.cgi?Code=change>

会員情報変更のご連絡は、学会事務局のアドレス E-mail : eces-manager@ecesj.com にメールをいただくことでも可能です。

会誌のお届け、ニュースレター、その他連絡では、かなりの不達が発生しています。よろしくお願いいたします。

7.2 既刊学会誌を希望する会員に頒布します（郵送料は負担してください）

学会事務局では、既刊学会誌の在庫整理を進めています。今後は一定の冊数を確保して、残りは希望者への頒布、廃棄を考えています。希望者多数の場合は、先着順です。

希望される会員は、学会事務局のアドレス E-mail : eces-manager@ecesj.com までお知らせください。申込者には、事務局から郵送料を計算してお知らせします。郵送料をいただいた後、発送します。

7.3 会員数およびLEE 購読者数

2018 年 1 月 24 日現在

	会員数	対前年同時期比較	LEE 購読者数	対前年同時期比較
名誉会員	8 名	増減なし	1 名	増減なし
正 会 員	919 名	増 29 名	81 名	減 4 名
学生会員	127 名	増 30 名	2 名	増 1 名
合 計	1,054 名	増 59 名	84 名	減 3 名
賛助会員	37 法人 (54 口)	増減なし		